

IV 全数把握感染症

IV 全数把握感染症

1. 一類感染症

全国、大阪府とも発生はなかった。

2. 二類感染症

結核以外の二類感染症は、全国、大阪府とも発生はなかった。

結核については、下記ホームページを参照されたい。

(財)結核予防会結核研究所 疫学情報センター

<https://jata-ekigaku.jp>

(文責：皐月)

3. 三類感染症

●コレラ

大阪府内では、コレラの発生はなかった。

●細菌性赤痢

30週に1例の届出があり、感染地域はミャンマーと推定され、*Shigella boydii* 1が分離された。無症状病原体保有者であった。

●腸チフス

14週から31週に3例の届出があり、感染地域は2例がバングラデシュ、1例がミャンマーと推定された。3例の患者の共通症状は高熱で、1例で脾腫、1例で下痢、1例で脾腫、便秘、意識障害、難聴が認められた。

●パラチフス

18週に1例の届出があり、感染地域はインドネシアと推定された。高熱、比較的徐脈、脾腫、下痢、頭痛が認められた。

●腸管出血性大腸菌感染症

226例の届出があった。年間を通しての発生状況については、例年同様に6月から9月にかけて多く発生した(図1)。感染者の年齢は20歳代が最も多く、男女間では感染者数に大きな違いは見られなかった(図2)。なお、HUS患者の報告は11例であった。

(文責：河合)

図 1 腸管出血性大腸菌感染症 週別発生状況 2024 年 1～52 週

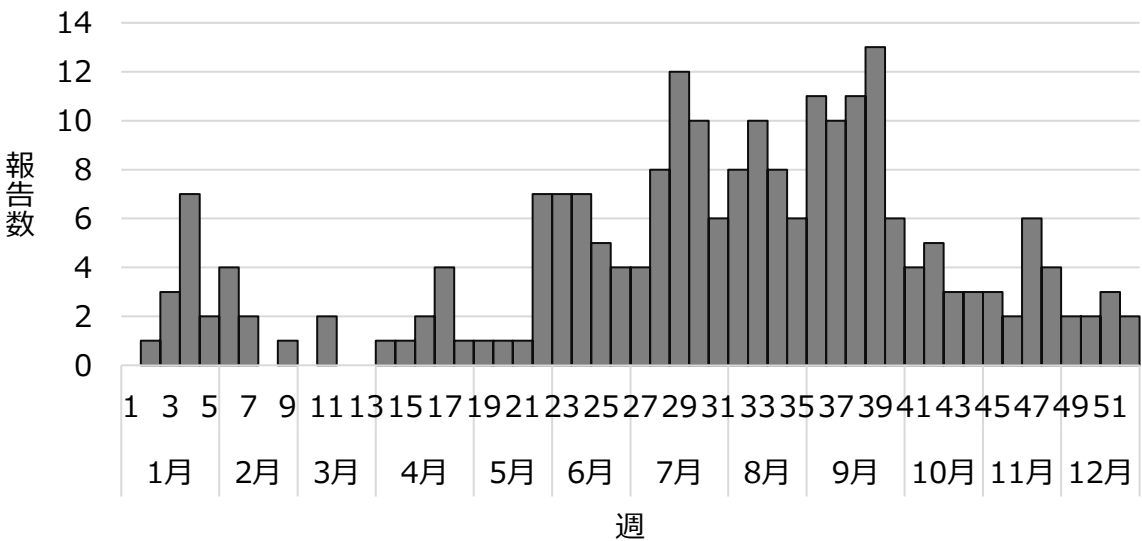
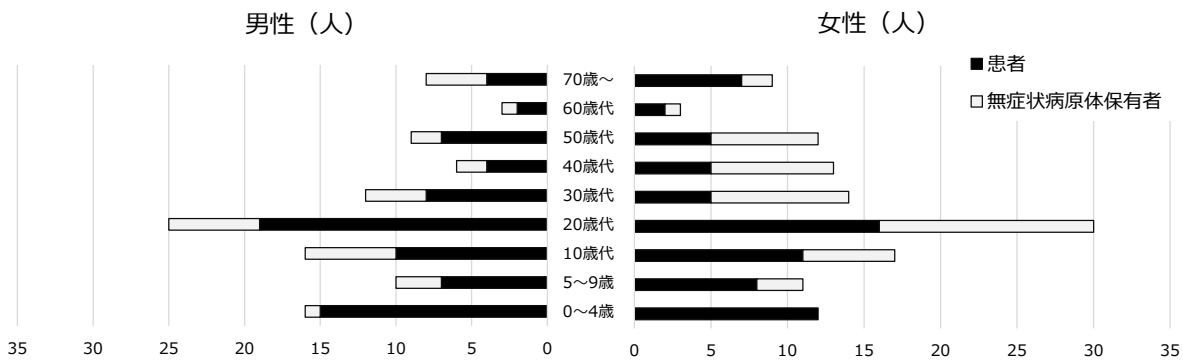


図 2 腸管出血性大腸菌感染症 年齢別発生状況 2024 年 1～52 週



4. 四類・五類感染症（全数把握分）

2024 年、大阪府における四類・五類感染症の届出数は、32 疾患 3,305 例であった。2023 年の 34 疾患 2,987 例に比べて 2 疾患減少し、届出数は 318 例の増加であった（表 1）。

四類感染症の大阪府内届出数は 11 疾患 178 例であり、前年に比べて 35 例減少した（表 1）。前年届出がなかったジカウイルス感染症、重症熱性血小板減少症候群の報告があった。一方、前年届出があったエムポックス、日本脳炎、ライム病、レプトスピラ症は 2024 年に届出がなかった。その他、前年から増加した疾患は、A 型肝炎、デング熱、日本紅斑熱、マラリアの 4 疾患であり、減少した疾患は、E 型肝炎、つつが虫病、レジオネラ症の 3 疾患であった。A 型肝炎は、6 例の届出があり、前年の 2 例に比べて、4 例の増加であった。ジカウイルス感染症は 1 例（大阪市）の届出があり、推定感染地域は国外であった。重症熱性血小板減少症候群は 4 例（豊能、中河内、堺市、泉州、各 1 例）の届出があり、推定感染地域

が大阪府内であったのは 3 例、大阪府外であったのは 1 例であった。チクングニア熱は 1 例の届出があり、推定感染地域は国外であった。つつが虫病は前年より 1 例減の 2 例の届出があり、そのうち 1 例の推定感染地域は大阪府内であった。日本紅斑熱は前年より 8 例増加の 17 例で、このうち 4 例が泉州ブロックからの届出であった。また、17 例のうち推定感染地域が大阪府内であったのは 6 例、大阪府外であったのは 11 例であった。デング熱は 1 例増加の 21 例、マラリアは 4 例増加の 6 例であった。いずれも渡航歴の記載があった。レジオネラ症は 18 例減少し、113 例の届出があった。

五類感染症の大阪府内届出数は 21 疾患 3,127 例であった。前年の届出数に比べて 353 例の増加であった。2023 年より 14 疾患増加した。このうち、主に増加した疾患について述べる。クリプトスポリジウム症は 2021 年以降届出がなかったが、2024 年は 4 例の届出があった。侵襲性髄膜炎菌性髄膜炎菌感染症は、前年より 8 例増加の 11 例であった。その他、侵襲性インフルエンザ菌感染症は、50 例から 67 例、侵襲性肺炎球菌感染症は、176 例から 256 例、播種性クリプトコックス症は 8 例から 14 例に増加した。一方、梅毒は前年より 74 例減少し、1,943 例であった。劇症型溶血性レンサ球菌感染症、百日咳及び麻疹については、別項で後述する。

全国の 2024 年における四類・五類感染症の届出数を見ると、34,544 例で前年の 29,767 例と比べて 4,777 例の増加となっている。

全国の上四類感染症では、届出のあった 23 疾患のうち、15 疾患で増加し、7 疾患で減少した。1 疾患は増減がなかった。主に、上四類感染症で増加した疾患は、A 型肝炎が 56 例から 137 例に、デング熱が 176 例から 231 例に、日本紅斑熱が 501 例から 523 例に、日本脳炎が 6 例から 9 例に、マラリアが 36 例から 45 例に、レジオネラ症が 2,288 例から 2,428 例に増加した。ダニ媒介脳炎、ボツリヌス症、類鼻疽は前年届出がなかったが、それぞれ 2 例、7 例、2 例の届出があった。一方、主に減少した疾患は、エムボックスは 225 例から 19 例と大きく減少した。その他、重症熱性血小板減少症候群が 134 例から 122 例に、つつが虫病が 444 例から 353 例に減少した。

全国の五類感染症では、届出のあった 22 疾患のうち、15 疾患で増加し、7 疾患で減少した。主に増加した疾患は、アメーバ赤痢が 489 例から 523 例に、カルバペネム耐性腸内細菌科細菌感染症が 2,113 例から 2,293 例に、劇症型溶血性レンサ球菌感染症が 949 例から 1,893 例に、侵襲性インフルエンザ菌感染症が 567 例から 651 例に、侵襲性髄膜炎菌感染症が 21 例から 66 例に、侵襲性肺炎球菌感染症が 1,988 例から 2,555 例に、百日咳が 1,015 例から 4,093 例に、麻疹が 28 例から 45 例にそれぞれ増加した。一方、減少した主な疾患について見ると、ウイルス性肝炎は 244 例から 228 例に、急性脳炎が 658 例から 633 例に、梅毒は 15,078 例から 14,816 例に、風しんは 12 例から 9 例にそれぞれ減少した。

新型コロナウイルス感染症流行以前の生活様式に戻ったことや、コロナ禍で感受性宿主群

が多くなっていることが全数把握感染症の発生動向にも影響したと考えられる。

表1 四類・五類全数把握感染症届出数

種別	疾患名	届出数		大阪府内計		全国計	
		2024年	2023年	2024年	2023年	2024年	2023年
四類	E型肝炎	6	12	527	552		
	A型肝炎	6	2	137	56		
	Eキノコックス症			20	13		
	エムボックス		22	19	225		
	オウム病	1	1	4	8		
	回歸熱			11	23		
	Q熱			6	1		
	コクシジオイデス症			4	4		
	ジカウイルス感染症	1		4	2		
	重症熱性血小板減少症候群	4		122	134		
	ダニ媒介脳炎			2			
	チクングニア熱	1	1	10	7		
	つつが虫病	2	3	353	444		
	デング熱	21	20	231	176		
	日本紅斑熱	17	9	523	501		
	日本脳炎		1	9	6		
	ブルセラ症			5	2		
	ボツリヌス症			7			
	マラリア	6	4	45	36		
	ライム病		3	25	28		
	類鼻疽			2			
	レジオネラ症	113	131	2428	2288		
	レプトスピラ症		4	53	49		
四類合計		178	213	4,547	4,555		
五類	アメーバ赤痢	40	53	523	489		
	ウイルス性肝炎	26	26	228	244		
	カルバペネム耐性腸内細菌目細菌感染症	181	173	2,293	2,113		
	急性弛緩性麻痺	2	2	48	55		
	急性脳炎	22	20	633	658		
	クリプトスポリジウム症	4		27	16		
	クロイツフェルト・ヤコブ病	9	7	172	170		
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	105	55	1,893	949		
	後天性免疫不全症候群	89	80	1,010	951		
	ジアルジア症	3	4	42	39		
	侵襲性インフルエンザ菌感染症	67	50	651	567		
	侵襲性髄膜炎菌感染症	11	3	66	21		
	侵襲性肺炎球菌感染症	256	176	2,555	1,988		
	水痘（入院例）	33	26	486	407		
	梅毒	1,943	2,017	14,816	15,078		
	播種性クリプトコックス症	14	8	191	173		
	破傷風	4	1	86	110		
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	15	15	124	115		
	百日咳	291	50	4,093	1,015		
	風しん	1	2	9	12		
	麻疹	11	5	45	28		
	薬剤耐性アシネトバクター感染症		1	6	14		
五類合計		3,127	2,774	29,997	25,212		
四類五類合計		3,305	2,987	34,544	29,767		

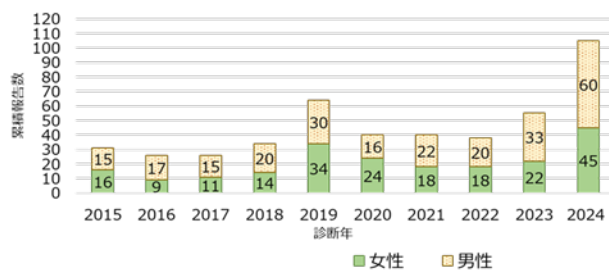
●劇症型溶血性レンサ球菌感染症

2024 年、大阪府において、劇症型溶血性レンサ球菌感染症の届出は 105 例で、過去 10 年で最多であった。2023 年の 55 例に比べ大幅に増加した。週別届出数は第 9 週、第 31 週が 5 例で最も多かった。性別は男性 60 例、女性 45 例と男性が 57%を占めた。年代別には、多い順に、80 代以上が 36 例(34.3%)、60 代が 23 例(21.9%)、70 代が 17 例(16.2%)であり、60 代以上の高齢者の報告が 72.4%を占めた。届出時に血清群の記載のあった報告は 93 例で、内訳は、A 群 56 例(60.2%)、B 群 12 例(12.9%)、C 群 1 例(1.1%)、G 群 24 例(25.8%)と、A 群が 6 割を占めた。

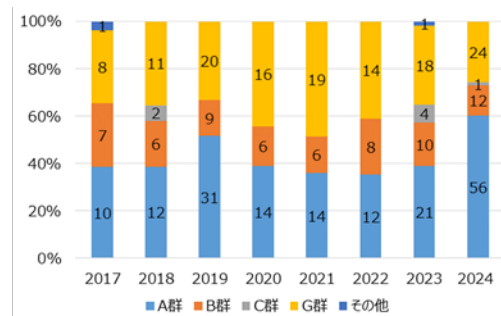
病原体の情報については、後述(V 検査情報 119 ページ)に、近畿地区内で報告のあった劇症型溶血性レンサ球菌感染症(届出に満たない重症溶血性レンサ球菌感染症を含む)のうち、原因菌株が確保できた 180 例について実施した解析の報告を掲載している。

(文責 西田)

診断年別性別累積報告数



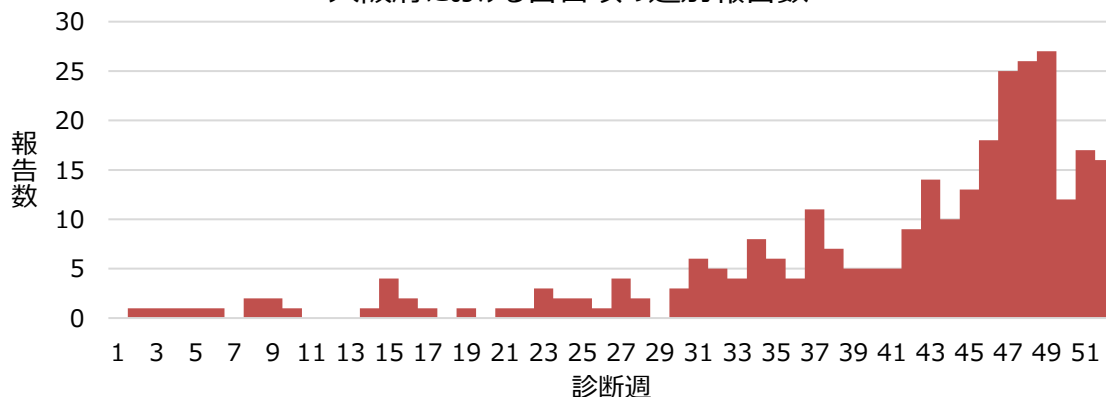
届出時に記載のあった血清群の内訳



●百日咳

2024 年、大阪府における百日咳の報告数は 291 例であった。週別報告数について、年後半以降増加傾向となり、第 49 週に最も多い 27 例の報告があった(下図)。性別の内訳は、

大阪府における百日咳の週別報告数



男性 166 例、女性 125 例であった。年齢別では、11 歳の報告数が最も多く 35 例で、年齢の中央値は 12 歳であった。また、0 歳の報告数は 11 例であった。感染地域について、ブロック別で多い順に、大阪市東部 75 例、北河内 74 例、泉州 35 例であった。家庭内感染について、同胞からが 32 例、父親と母親からがそれぞれ 14 例であった。検査法の内訳は、PCR（Polymerase Chain Reaction）法が 117 例と最も多く、次に多かったのが LAMP（Loop-Mediated Isothermal Amplification）法の 56 例であった。ワクチン 4 回接種済みは 172 例であった。また、0 歳児のワクチン未接種者は 11 人中 7 人であった。大阪府でもマクロライド耐性百日咳が報告されており、今後もマクロライド系抗生物質（クラリスロマイシン、アジスロマイシン等）による薬剤耐性菌の発生状況に注意が必要である¹⁾。

（文責 山中）

参考文献

1. マクロライド耐性百日咳菌を検出した大阪府の小児 3 例 | 国立健康危機管理研究機構 | IASR Vol. 46 p42-43: 2025 年 2 月号 [Internet] . [cited 2025 August 20] . Available from: <https://id-info.jihs.go.jp/surveillance/iasr/46/540/article/140/index.html>

●麻しん

2024 年、大阪府において、麻しんの届出は 11 例であった。2023 年と比べ 6 例増加した。週別届出数は第 11 週が 5 例で最も多かった。ブロック別では中河内ブロック、泉州ブロック、大阪市が各 3 例、北河内ブロック、堺市各 1 例であった（図）。全国における 2024 年の届出は 45 例であり、前年と比べ 17 例増加した。全国の集計において、推定感染地域が国外とされたのは 22 例あった。海外への渡航者あるいは海外から来日する外国人の増加に伴い、日本国内での麻しんの発生に対する注意は今後も必要である。（文責: 皐月）

（図）大阪府における週別麻しん届出状況

